



主の祈り #4

詩篇全体は主の祈りに要約される

2017.12.5

詩篇全体は、主の祈りに要約される
ダビデの契約 (神の国、主の支配の完成)

詩篇

- ダビデ 子が主となる 42:72: #2
- モーセ 主は岩である 1:41: #1
- 90:106: 民は家 モーセ #4
- 73:89: 神の家 ダビデ #3
- 37:119: 主は良き者 主は良き者 119 #5.2
- 1:107:118: 1. 御名に感謝せよ 107:118: #5.1
- 135:150: ハレルヤ・アーメン 7. 感謝 #5.4
- 120:134: その恵みほとこしえ 40. 聖歌 #5.3

主の祈り

- #1 昔の王が良徳をさばく (御心算)
- #2 子が主とあり榮えを改めしむ (主の祝福)
- #3 主が善いことを覚えしむを建てしむ (主の御心算)
- #4 主の王が国をさつこ (主とあり國民となる)

要約された詩篇

- #5.1 ハレルヤ
- #2.#3 1. 御名が聖とされるように
- #1.#4 2. 御国が来ますように 3. 御心が天と地とを
- #5.1 ハレルヤ
- #5.2 4. 日毎アペンと
- #5.3 5. 罪を赦したるは 6. 試みにあはせり
- 悪者から救いたるは
- #5.1 連れ出した、ハレルヤ!
- #5.2 主の御心 (いのちアペン)
- #5.4 完了した、ハレルヤ!
- #5.3 恵みあふすは

詩篇全体は主の祈りに要約されているということです。

詩篇5つの巻物がありました。1,2,3,4,5巻、詩篇全体の巻物についての分析は、別の研究の資料を見てください。最初の4つの巻物、1篇から106篇まで、これは神様の約束、神様の愛があらわされれている。それに対して第5巻の4つの詩集、1,2,3,4という4つの詩集は、それに対する民の応答であるという詩篇の150個のまとまりがあります。

詩篇全体と言っているときに、旧約聖書の中で、祈りの詩篇と言われたり、御霊の歌とか言われたりするものですが、この詩篇というものは、神様の約束の成就、特にダビデの時代の契約の約束が成就する。アブラハムに約束されて、ダビデに約束されたその約束が成就するという神様の国の完成図、主の支配の完成図。これが、御霊の歌である詩篇の歌っているところです。

ということは、これが神様の約束の行き着くところなわけです。神様の御国が完成すると、このすべてが成就されているという状態になります。ですから、報いの型である主の祈りとこの詩篇全体を比べるということに意味があるわけです。

「神様の愛」と「民の愛」ということでは、主の祈りの前半と主の祈りの後半が、「父となる」「子となる」という2つに分けられていましたので、その2つの区分に似ているなということだと思えます。「1.御名が聖とされるように」「2.御国が来ますよう

に」というこの2つ。「3.御心が天で、地でも」といつているところ、ここは、御国と義ということで、セットで考えてください。

そうすると、「1.御名が聖とされるように」と「2.御国が来ますように」というこの2つがどこかの役割になっているのでしょうかということ。枠組みですので、過不足なくパズルみたいに当てはまるかということを見ないといけないわけです。ここの御国だけが見えているとすると、形としては、「じゃあ、ほかは何なの？」ということになってしまいますけど、ここが御国です、こちらが御名ですということであれば、「なるほど、この2つの枠組みとしてここを見なさいと編集されているのですね。」ということがわかりますから、多すぎず少なすぎず、枠組みになっているかを確認することが大切です。

前半の第1集から第4集の「王様、王様、家、家」というふうに見ました。主は岩なる王である、「子が王となる、神様の家が建てられる、民が家となる、民は神様の家である」という「王、王、家、家」ということなのですが、御国が来ますように、御心が天で行われるように地でもと言っているところが1番のところと第4巻、第1巻と4巻ということだろうということで、ここに(右上#1~#4)その理由が書いてあります。

第1巻は、岩なる王様が善悪を裁く。善と悪を裁くその主の道について、第1巻でたくさん出てきます。御心、義しさ。岩なる王様が善と悪を裁くのだ、その善悪を裁く王様ですということがあらわされるというのを待っているというのが、御国が来ますように、御心がおこなわれますように、ということである。

第4番目(先にいきますね)、王の王が国を作る、主は王である、主は聖であるという第4巻の96,7,8,9あたりのセットです。それと100篇でも言われています。主は私たちの牧者である、王である、そして、その国が作られる。その国が作られる歴史が、103,104,105,106というふうに通きの歴史が書いてあります。これは、王の王が国を作る、国々の上に高く上げられる国を作るということが第4巻のテーマになっていますので、これも御国が来ますように、御国についての頭側と体側と言えらると思います。

第3巻は、神様の名が付けられている家、神殿、神様の宮が建てられる。主は誓いを覚えて宮を建てるというのがダビデへの約束の半分でしたね。その主の御名の家が建てられるということですので、御名が聖とされるように、というほうであろうという第3巻。

第2巻はちょっと難しいかなと考えていましたけれど、ここは子が王となるということですから、王の国が来るという話ではないかなと…それも言えますが、子が王となるときに栄光があらわされるということが、栄光に向かっているというのが第2巻の大切なテーマになっています。それと、主が祝福する、主をほめたたえるという祝福し合う関係であるということも、第2巻でクライマックスのテーマになっているようなものです。ですから、子が王となるということを通して、主の栄光があらわされる、主の栄光の家であるという意味で、第2巻は、御名の栄光があらわされること、子が王となる、子を通して全世界に祝福が与えられる御名の栄光があらわされる…ということで、第2巻は主の祈りの1番をあらわしているのではないかと考えました。

御国が来ますようには、1巻と4巻。御名が聖とされるようには2巻と3巻というふうここに書いてあります。

後半の民が主を賛美するというほうはどうだろうということなのですが、「4.日毎のパンを与えてください」「5.罪を赦して」「6.試みに会わせないでください」という3つです。3つですけど、2つということが言えますね。4と5,6。日毎のパンを与えてくだ

さいというほうは、主の教え、いのちのパンを与えられる一番良いものがみことばです。から、119篇は、日毎のパンのほうかなと。

罪が赦されて、試みにあわせず守られるということは、都上りの「その恵みはとこしえまで」という導きについての詩集であらわされているかなというように見たので、4番目、5番目、6番目が、第5巻の2集、3集。

第5巻の1集と4集はどこに行ってしまったかなということですが、第1集、第4集はどちらも、主に感謝せよ、ハレルヤ、アーメンという詩篇が1集と4集に入っています。1集のほうは、どちらかという、連れ出されたという救い。死、悪から、災いから連れ出されたハレルヤというのが1集のほうの強調点です。4集のほうは、最後にそれがすべて与えられた、完成したハレルヤ。ハレルヤに2種類がここにあります。連れ出された、御国が始まったというほうが、第1集(のハレルヤ)。そして最後に全世界が聖なる名をほめたたえるようになるというのが、第4集のハレルヤということなので、1集と4集は、上のほうに当てはめてみるができるのではないかなということ、後ろのほうに1と4を入れないで、上のほうの1と4という枠組みで見ました。

ということで、詩篇全体を主の祈り、神様の教えてくださった求めるべき報いの要約と、祈り全体、祈りの書物全体が一致しているということ、分析してみると、それぞれの主の祈りの課題を長く祈ったら、これくらい長く祈れるということにもなるかと思えます。